

資本主義から共生主義へ

ー共生主義宣言から学ぶー

○ 前西南学院大学人間科学部教授 賀戸 一郎 (001374)

資本主義、共生主義、共生主義宣言

1. 研究目的

わが国における共生という言葉は批判しがたいものの、具体的な運動や改革を伴わないまま広がっており、資本主義の一部を担って用いられることもある。そのため、昨今の共生という言葉は、人間の尊厳の軽視や自然の破壊などに抗する意味は薄れつつある。

近年、フランスで公表された「共生主義宣言」は、共生という概念を主義として立脚させるもので、資本主義や共産主義などと対比した具体像を持って、地域に息づく共生運動を伴うほどに展開されつつある。こうした世界的な変化は、我が国の社会福祉が地域共生社会を進めるにあたっても、重要な示唆を与えるであろうことは疑いない。

そこで、本研究では、わが国の社会福祉が抱える共生社会・地域共生社会構築への壁を突破する糸口として、共生主義やその宣言の示すところを明らかにするとともに、わが国における諸課題を考察することとした。

2. 研究の視点および方法

わが国において、かねてより伝統的に使われてきた共生という言葉は、肯定的な目標や理念を示しはしても、社会に生じている多くの問題に対して具体的な制度や政策を示すことができなかった。本研究は、こうした現状への懐疑的な視点に発するものであり、初歩的な文献から得られる示唆へと視点の転換を求めている。

本研究は、西川潤、マルク・アンベール編の『共生主義宣言』（2017年3月30日）を中心として、関連する文献から、整理し考察を得ることとする。

3. 倫理的配慮

本研究は文研研究によって行う。文研研究においては、日本社会福祉学会研究倫理指針「学会発表」の規定を順守し、引用等においては厳密な倫理的配慮を行っている。

4. 研究結果

「共生」という言葉は、少数者との交流、男女平等などの格差縮小、人間と自然との共生の、主に三つの意味で用いられてきた。イヴァン・イリイチが提唱した「conviviality（コンヴィヴィアリティ）」はこれらを総合する思考であり、「共生主義」もこの線上にある。

この新しい言葉は、新しい現実に対応している。様々なデモ、抗議、運動などは、単なる一時しのぎに終わらせるべきではなく、自滅への奔流を共に押し返そうという共通的な問題意識を読み取ることができる。それは、共により良く生きるための道を求めようという共生主義であり、人と人のつながりや協力を大切にして、他者への思いやりと、自然への配慮を忘れない暮らし方を意味している。

いずれも、共生主義を名乗っているわけではないが、地域共生、環境共生、都市と農村の共生など、実践の報告から、自身の身の回りで起こっている、そしていつでも起こし得る共生主義へのイメージを得ることができる。こうした人々の倫理の観点から既存の問題を問い返す運動、次の段階を構想する文化運動は、ポスト資本主義、ポスト成長主義に新たな発展を目指す思想形成であるといっても良い。

共生主義は、個人に許される行為や自制について（倫理）、政治団体の正統性（政治）、人が自然から得てよいもの（環境）、倫理、政治、環境と矛盾せずに、我々が生産してよいもの、量、質（経済）に、宗教、スピリチュアリティを加えた5つの基本的問題から理論が導かれている。

グローバリゼーションの下での軍事化、民主主義の腐敗、成長幻想などの資本主義的現体制の限界を暴露し止めつつ、人間共同体に属するという感情、社会の絆などを養う必要がある。格差是正、貧困対策、地域活性化などの社会福祉諸実践における人間の尊厳を真の根底に置く共生主義は、その出発点となる。

5. 考察

経済と科学技術に振り回されている我々は、まずは一人ひとりが成長し、自律することで、資本主義から共生主義へと転換することが求められている。宗教は、経済や技術の支配から多かれ少なかれ距離を置いていて、信者たちを結びつけている。宗教をもたずとも、できる限り抗することによって、社会をより人間的にすることが可能となる。

共生主義は資本主義に抗する思想としてはいいが、実現するためには、コミュニティをめぐる議論と同じく、具体論として掘り下げるには一層の努力が求められる。すなわち、他者を愛することによって、自分を愛するように、即効性のある方法論ではなく、我々一人ひとりが人間たる心を取り戻していくことが出発点になるだろう。

そうした一人ひとりが身の回りの運動に関心をもつことが、共生主義は個人の主義から社会の主義として、都市と農村を結び、地域の共生を生み、あるいは、資本主義における開発を止め、抑止力としての転換に至ることができると思われる。これらが戦争、国家主義、経済成長信仰など、社会福祉が抱える共生社会への壁を乗り越え得る糸口となる。

私たちは社会を回しているのか、社会に回されているのか。経済成長なき時代においては、現代の豊かさを問い直す必要があり、共生主義というイデオロギーは大きな示唆を与えているといえるだろう。